

第9期事業報告書

(2012年4月1日から2013年3月31日まで)

はじめに

2012年度もインド・ウッタールプラデシュ州アラハバード県を中心に農村開発事業の支援活動を行った。過去9年間、継続的に実施されてきた農村教育、農村リーダー育成事業に加え、JICA 草の根技術協力事業が実施された。仕事量が増え、且つ活動内容が多様化する中で、現地スタッフには多大な苦勞が強いられたが、それぞれが協力する中で、それを乗り切ることができたことは幸いであった。

また、アーシャが支援する母子保健関連事業の成果が JICA やアラハバード県の保健関連機関に認められ、政府機関の保健スタッフと協働で仕事ができるようになったのは大きな成果であったと言える。更には数多くの申請団体の中からアーシャが申請した母子保健事業案件（5年間）が採択されたことはその成果とも言える。2013年1月よりその事業は実施されている。このことはインド事業を経済的に支援する上でも大きな力となっている。

本会が設立され、国内事業活動の強化と拡大、国内とインド事業のコミュニケーションの円滑化のために那須塩原市に同会交流センターを開設した。この設立はアラハバードの活動をより多くの方々に理解して頂くための後押しにもなっていると思われる。2012年度に於いては、2回のインドスタディーツアーが実施され、本会活動の支援の輪が広がった。

本会が発足し、10年目に差し掛かった。その間、多くの支援者、財団助成金、日本政府系受託業務収入（JICA）によって、本会の活動が可能になっている。また現地のインド人スタッフ、本会派遣スタッフ、短期派遣専門家、国内事務局、および本会理事、協力者らの多大な尽力によって実りある活動成果を上げることができている。心より感謝を申し上げる。



1. 農村指導者研修所設立運営支援事業

「持続可能な農業研修コース（SCSA）」への支援

例年同様、当コースの実施のために、当会理事・三浦、派遣スタッフ・インターン、専門家はそれぞれの専門分野、技術を活かし、授業、実習において直接講師として参加し、更にカリキュラム、コース運営に関する助言活動を行った。派遣専門家、インターンが増えたことで、当カリキュラムの充実を図ることができた。7月より始業したSCSAに8名が入学した。

- ・アラハバード県：女性2名
- ・東北インド：男性1名・女性1名
- ・ミャンマー：男性2名・女性1名
- ・日本：女性1名

女性が半分以上を占めていたにも関わらず、ドロップアウトも出さず、研修が滞りなく行えたことは大きな自信となった。

研修は有機農業による生産、加工、販売に関わる一連の科目を網羅し、理論と実践とのバランスを考えながら、包括的で持続可能な農業理論と技術の向上を目指して支援を行った。また、研修生が卒業後、農村リーダーまたはNGOワーカーとして即戦力になりうるような研修を網羅した。

具体的には、有機農業、稲作、養魚、キノコ栽培、養鶏、食品加工、農村組織、簿記等の技術分野の他に開発論、農村管理運営、農村調査、研修旅行、リーダーシップ等の科目を取り入れた。2013年4月12日、全員が卒業し、帰国又は帰郷した。

2. 未就学若年労働者教育施設設立運営支援事業

今年度は実施なし。

3. 未就学児のための初等教育施設 設立運営支援事業

2011年度まで、アラハバード県の農村地域にアーシャ学校9校（生徒数約700名）の運営、教師の育成、特別クラスの指導・助言を行ってきたが、2012年度は支援する学校を4校に限定した。その理由はいくつかのアーシャ学校がある農村で、以前に比べ公立又は私立小学校の教育が向上、強化されアーシャ学校に通う子どもが少なくなったことが挙げられる。一方、アーシャ学校3校においては生徒の数が増え、その学校だけでも550名近くなった現状がある。農村のアーシャ学校の必要性、要望、および各アーシャ学校の教諭の能力を吟味した結果、4校のアーシャ学校に対する支援を集中して行うことに決めた。来年度は3校の支援を行う計画である。

教師の給与補助金の支給を取りやめ、その代わりにレギュラーに出席している生徒に対し、月15から20ルピー（約50円）の奨学金を供与した。この奨学金は直接アーシャ学校に入り、主に教師の給与のために使われた。この処置は担当教師がただ単に授業をするだけでなく、学校に通っていない児童の両親を説得し、教育を受けさせるようにすることも彼らの仕事であることを認識してもらうための処置である。また、受け持ち生徒数をしっかり確保することによって、自らの収入を増加させることを目標にした。幸い、この奨学金供与によるインセンティブの方法は3つのアーシャ学校で功を奏した。即ち、生徒数が格段に増えたと同時に生徒数の減少がみら

れなかった。

また、今年度は可能な限りアーシャ学校の教師が学校に関わる特別プログラムを自分たちでできるように指導、助言活動をした。具体的にはアーシャ学校教師が実施する小学校高学年のための環境教育の実施、アーシャ学校合同運動会等は当学校教師が主体になって実施された。

また、アーシャ学校が自立できる方法の一つとして、政府登録が検討された。教師が中心になって団体 (Society) を設立し、それを通してアーシャ学校の登録をすることが必要である。そのためにも、今後も支援、協力をする必要があると考える。

4. 農村女性のための成人学校設立支援事業

農民学校での裁縫クラスの実施

今年度の農村女性のための裁縫クラスは、数年前より育成してきた農村女性4名（7月より3名）を教師として、事業対象地域にある農民学校3校で実施した。研修期間は6か月、参加者は50名、月謝50ルピー（約80円）とし、未婚女性の民族服であるサロワルクルタ、ブラウス、子供の服の裁縫技術を習得できるよう研修を行った。

また、研修を受けた者の中から優秀なもの6名を選び、アーシャ学校の制服360着を制作した。この研修を受けた者には新品の足踏みミシン一台を本会より供与した。

育成してきた農村女性が同じ農村住民に技術、知識を教えることができるようになってきたことは今後の事業の方針（農村住民リーダーが隣人に新しい技術、知識を教える）に大きな希望を与えた。今後優秀な女性の技術をより一層活かすためにも、裁縫技術を使ったビジネスの開発が必要と思われる。

5. 奨学金支給事業

(1) ミャンマーへの支援

ミャンマー・カチン州出身で、メッタ開発財団から送られてきている研修生、Ms. Zawng Nyoï (SCSA の卒業生) に引き続き奨学金を提供した。彼女はサムヒギンボトム農工科学大学家政科学科3年生である。将来、ミャンマーで家政学の教員となることを目指している。

今期においてメッタ開発財団より2名、ミャンマーバプテスト総連より1名の研修生のSCSA受け入れを支援した。

(2) 未就学児のための初等教育施設 設立運営支援事業

「3. 未就学児のための初等教育施設 設立運営支援事業」にも記述したが、レギュラーに出席している生徒に対し、月15から20ルピー（約50円）の奨学金を供与した。

(3) 「持続可能な農業研修コース (SCSA)」の支援

「1. 農村指導者研修所設立運営支援事業」に記述したSCSAの学生2名に奨学金を供与した。

6. 井戸、トイレ設置、下水整備、衛生教育等の環境改善支援事業

今年度は実施されなかった。

7. 農村地域開発、農業改善普及支援事業

(1) 女性と農村青年のための自助グループ（SHG）組織づくりに対する支援

本会と継続教育学部の協働で設立されたアーシャスマイルトラスト（NGO）のスタッフを育成するための支援を行った。しかしながら、サムヒギンボトム農工科学大学当局の指示により、継続教育学部はその運営から手をひくことになった。よって、本会からの支援も2013年3月末で終了した。しかし、フィールドワーカー2名は継続教育学部が実施している母子保健事業、支援しているアラハバード有機農業組合のスタッフとして今年度以降仕事をしている。

(2) 健康栄養・農村母子保健の事業支援

4年前より力を入れているこの事業を推進するために、専門家・三浦孝子（母子保健・母乳育児専門）を3回派遣した。彼女は継続教育学部の担当スタッフ3名と共に、農村保健ボランティア（VHV）の育成とVHVのアシスタント（VHA）の育成を手掛けた。彼女たちがチームを作り、自発的且つ自立的活動ができるように指導、助言を行った。

前述したように2013年1月より、JICA草の根事業（JPP）で採択された母子保健事業が開始された。事業期間は5年間である。育成された農村保健ボランティア（VHV）スーパーバイザー2名、セニアVHV8名、VHVアシスタント7名がジャスラ郡と及びシャンカルガル郡で活動している。また、2012年8月よりJICAの支援で事業対象地において事前調査（ベースライン調査）を実施できた。これは今後の活動、および活動の成果の評価をしていく上で貴重なデータであると考えられる。

(3) 貧困農民のための収入向上活動のための支援

①食品加工と日本米栽培支援

継続教育学部が支援してきたアラハバード有機農業組合の運営は自立に向け大きな前進が見られた。特に味噌、醤油の生産と販売は質、量ともに改善されている。また、農民のための収入向上の重要な要となっている日本米栽培は当初2トンたらずの生産から一挙に10倍の20トンとなった。それらの生産物はインド全域の個人、会社、レストラン等で販売されている。

今後インドに進出する日本企業が増加することを踏まえ、将来50トン程の日本米栽培を目標とし、将来は組合が生産し、精米と販売は会社組織で行うことを検討する必要があると思われる。今後日本米の生産を単に個々の収入向上としてではなく、有機農業運動の継続化、組合運営費を賄うための試金石として考え、支援していく必要がある。

②キノコ栽培開発の支援

今期はイオン環境財団の支援が得られたので、新しいキノコ栽培のために新たなキノコハウス2棟を構築した。この棟により、ボタンマッシュルーム、ミルキーマッシュルーム、ストロームッシュルーム等の試験栽培が可能になった。今後、これをどの地域で普及し、販売できるのかを調査、検討する必要があるが、持続可能な農業研修コースの学生の多くはキノコ栽培に関して大きな期待がある。

③ニーム種肥料、インドハーブ入浴剤、モロヘイヤ粉末の生産と販売支援

今期に置いてニーム種肥料10トンを輸出し、愛農ネットに販売した。ニームの木はインド全域に自生する薬用木であり、病虫害防除に広く使われてきたが、化学農薬が普及される今日、その利用は十分とはいえない状況である。この貴重な資源を貧困農民の収入向上に連携できるような支援が必要である。

また、ニームの葉を入れたインドハーブ入浴剤400個、モロヘイヤの粉末の試験生産、販売の支援を行った。これらは、アーシャ本部、愛農会、サポーター等の意見を聞きながら慎重に進める必要があると考える。

(4) 第8回収穫感謝祭 (HTC) 開催の支援

2013年2月23日、ギンジ村で収穫感謝祭の開催を支援した。継続教育学部、SHG、アーシャ学校、アラハバード有機農業組合、裁縫クラス、母子保健活動の活動を村人に紹介することが出来た。

子供たち、SCSA 学生、農村保健ボランティアによる歌や踊り等の催しものがあり、700名以上の近隣住民が祭りに参加した。SHG 手作りの昼食販売、環境保全、母子保健や教育の重要性を訴えるための寸劇等様々な催しが行われた。その他、継続学部の活動紹介、子どもや青年等による歌・踊り等様々な催しが披露され、よい交流の場となった。同時に、村の住民に広く、上記の活動を知ってもらう良い機会となった。

収穫感謝祭をプロジェクト対象村で行うのは4回目で、同農村出身のフィールドワーカー、継続教育学部のスタッフが中心になって企画、実行するように助言をした。

8. 調査研究・啓発・広報事業

(1) スタッフの研修

2012年4月20～25日まで、日本人派遣スタッフ（町上、川口、三浦）及び継続教育学部の主なスタッフ22名がウットラカンド州のリシケーシで合同研修を行った。研修中、継続教育学部の今後の方針、展望についての話し合いがなされた。

キノコ栽培の充実を図るために、2012年5月、農場主任のサントシュクマールをヒマチャルプラデシュ州のシムラ市近郊にあるキノコ栽培研究所に出張研修させた。研修後、彼を中心にボタンマッシュルームおよびミルキーマッシュルームの試験栽培がなされ、持続可能な農業研修に生かされている。

(2) 愛農会との連携強化のための活動

2012年6月24日より28日まで、アーシャ理事・三浦、高丸、石原3名が愛農流通センター名古屋本部、グローバル(岐阜県恵那市)、愛農会本部、愛農食品流通センター(大阪)、オーガニックレストラン GRACE(岡山)、古野有機農場(福岡)、熊本土といのちを考える会(熊本)を訪問し、インド事業との連携強化についての話し合いがもたれた。その成果として、2013年1月30日から2月19日に実施されたアーシャ・愛農会連携スタディーツアーを開催できたこと、愛農学園農業高校卒業生が2013年度の継続教育学部の持続可能な農業研修コース(SCSA)に入学が決まったこと、また、愛農ネット本部が2012年度においてアラハバード有機農業組合からニームの種の試験販売を引きうけてくれたことは大きな成果であったと云える。

(3) ミャンマーとの連携

今後のミャンマーとの連携強化を図るために、三浦が11月23日から12月2日まで出張した。ヤンゴンに本部を置く、ミャンマーバプテスト総連、メッタ開発財団、ミャンマーキリスト教協議会、シャン州の北シャンバプテスト教会開発部、カチンバプテスト教会開発部、メッタ開発財団シャン州支部等を訪問し、開発責任者と今後の関係強化について話を持った。直ちに、今までの関係に変化は無いと考えるが、継続教育学部の卒業生の数名が所属団体の重要なポストについてきているので、より緊密な関係を続けることで、新たな進展がありうると考える

(4) インドスタディーツアーの実施

今年度、本会は2回のインドスタディーツアーを他の団体との共催で実施した。

1回目は1月29日より2月20日まで(短期コースは2月10日まで)で、愛農会との共催で行われた。特にこのツアーは本会とアラハバードプロジェクトの支援団体であった愛農会との協力関係をどのような形で築いていくかを模索するツアーであった。参加者は愛農関係者より6名、その他4名。アラハバードで生産されるニーム種肥料の販売、職員の交流研修、愛農学園高校卒業生のアラハバード研修等についての支援、協働等について話し合いが行われた。

2回目は3月4日より21日まで(短期コースは10日まで)実施された。これはインド三浦後援会との共催で行われた。ツアーに同行した本会理事長・牧野一穂を含め、8名の参加者があった。当後援会からは瀬戸牧師夫妻、愛農学園高校卒業生、高校生、愛農大学講座修了生、国際医療福祉大学在学学生2名である。愛農学園高校卒の寺田さんは4月よりマキノスクールで語学研修を受けた後、7月より当学部の「持続可能な農業・農村開発コース」(SCSA)に入学することが決まった。このような他の団体との協働で行うツアーは国内外とのネットワークを構築する上で非常に有効と考える。一方で、ツアー中の事故や緊急時にどのような体制にしていくかを、今後会として検討し、対策手引書等のようなものを作成しておく必要があると思われる。

(5) 活動報告会

2012年6月2日の本会総会の後、アーシャ理事である三浦は、北海道、山形、東京に於いて、プロジェクト支援者にインドプロジェクトの報告を行った。

(6) 広報活動

①会報発行

アーシャの活動、そのカウンターパートである継続教育学部のプロジェクトをより広く理解していただくために、年4回の会報を発行した。これらの編集、印刷、送付は全てインドにて行った。

②ホームページ、Facebook、Twitterの活用

国内事業強化のため、アーシャによって雇用された君嶋みのりは本会のホームページの更新作業、アラハバード有機農業組合の紹介ページを作成した。更に、本会のFacebookページを作成、Twitterアカウントを取得し、当会の活動を広く知っていただくためのツールと

して活用し、情報発信を行った。

これらの広報活動が功を奏し、有機農産物に関する問い合わせ、また、現地スタッフ、ボランティア、インターン、スタディーツアーに関する問い合わせが増えてきた。実際、2013年度応募してきた日本人学生、インターン職員候補者の多くは本会のホームページを閲覧し、応募するかどうか参考にしたとのことであった。加えて、支援をしてくださっている JICA や財団への本会の活動紹介とアピールをするためにも、今後もホームページを充実させることは重要であると思われる

③セミナーの開催

11/29(木)「日本－インド国交 60 周年関連セミナー」

会場：東京都新宿区 JICA 市ヶ谷ビル 主催：JICA 地球ひろば

講師：牧野一穂理事長、三浦孝子理事

参加者：39 名

9. 緊急支援活動事業

今年度は実施されなかった。

10. その他

(1) スタッフ及びインターン

●現地派遣スタッフ

三浦照男 2012 年 4 月～2013 年 3 月：継続派遣予定（プロジェクト総責任者）

町上貴也 2012 年 4 月～6 月（総務事務、広報、会計担当）

川口景子 2012 年 4 月～2013 年 3 月：継続派遣予定

（総務事務、広報、会計、事業形成、三浦学部長の補佐業務、SCSA 講師）

●継続教育学部インターン

鶴見真里子 2012 年 4 月～2013 年 3 月

（総務補助、日本人訪問者受入れ、母子保健事業料理教室講師、栄養改善セミナー担当）

大木恵利 2012 年 7 月～2013 年 3 月：継続派遣予定

（母子保健事業の農村調査と分析、SCSA 講師、会計）

●日本国内スタッフ

丹羽寿美 2012 年 4 月～2013 年 3 月：継続雇用予定

（総務事務、会計、プロジェクト調整）

君嶋みのり 2012 年 8 月～2013 年 3 月：継続雇用予定

（広報、総務事務補助）

(2) 専門家派遣

今期においてアーシャより派遣された専門家とその期間は以下のとおりである。

①三浦孝子（母子保健事業関連）

2012年7月9日より10日間（新規JICA草の根事業の準備のため）

2012年8月22日から45日間

2013年1月23日より3月30日まで2ヶ月間

②高丸和彦（アーシャ、愛農会連携インドツアーと有機農業に関する助言）

2012年1月30日より2月20日3週間

(3) 交流センターの開設について

2012年度総会にて、追加議案として提案された「国内事務局開設と国内事業開拓のための新規スタッフ雇用の件」が承認された。2012年7月17日より「那須塩原市南郷屋4丁目28-4 パストラル南郷屋 B202」の賃貸契約を締結、事務局として運営を開始するには総会にて議決が必要であることから、当面は交流センターとして運営することとして開設した。

また、ハローワークにて当会の職員募集の告知をしたところ、10名以上の問い合わせ・応募があり、面接の上、君嶋みのりを採用することに決定した。

○交流センターを開設したことによる効果

①今まで当会内のミーティングを行う際、理事の自宅にて持ち回りでミーティングを行っていたが、交流センターを利用することができるようになり、各理事宅の都合を問わず、今まで以上にミーティングを開催することができた。さらに、理事長が定期的に交流センターに来訪することにより、国内事務局スタッフとの連絡も密にとることができるようになり、国内作業の効率も向上した。

また、今まで個人宅で事務所を運営していたため、来客を受け入れられないケースもあったが、今後は広く来客を受け入れられる体制ができた。

さらに、平日はほぼ毎日交流センターにスタッフを常駐する体制が整い、問い合わせなどにも迅速に対応できるようになった。来年度以降は、交流センターにてイベントの開催や交流会など、今年度以上に有効活用する予定である。

交流センター 2012年8月～2013年3月までの利用実績

新スタッフ採用のための面接

定例会：理事長、副理事長、事務局にて月1回開催

ミーティング：現地スタッフ帰国時（随時）

来客：とちぎボランティアネットワーク職員、県庁職員、

NPO法人 地球の友と歩む会 事務局長

平日ほぼ毎日：9：00～15：30まで、丹羽・君嶋勤務

②情報の共有化

当会に関する資料を一元管理できるようになり、過去の会報、報告書など、来訪者に確認いただけるようになった。

○国内事務局新スタッフを雇用したことによる効果

①広報業務の拡大

今までの国内業務は、助成申請の手続きや報告、法人の手続き、会計作業などが中心となっており、なかなか広報に力を入れることができなかったが、君嶋みのりの雇用により、以下のような進捗があった。

- ・当会のホームページを随時更新し、イベント案内やセミナー告知など、頻繁な情報提供ができるようになった。また、インド在住の日本人向けに、アラハバード有機農業組合のホームページを製作した。
- ・Facebook、Twitterなどのソーシャルネットワーキングサービスを活用し、当会の広報に力を入れた。これらのツールにより、当会の情報を定期的に購読してくださる読者はFacebookで58名、Twitterで239名（5月15日現在）に上る。今後も拡大が期待される。

②国内イベントへの参加

当会の活動を地域に広く理解していただくため、以下のイベントに参加し、パネル展示やパンフレット・会報配布、アラハバード有機農業組合で製作された商品販売、現地スタッフが買入れた雑貨販売、募金活動などを実施した。

2012/ 9/30 フェアトレードまつり（会場：宇都宮市バンバひろば）

2012/10/13-14 アジア学院 収穫感謝祭（会場：アジア学院）

2012/11/13 とちぎ県民協働フェスタ（会場：栃木県庁）

2012/12/14 那須友の会 友愛セール（会場：西那須野幼稚園）

2013/ 3/15 那須友の会 友愛セール（会場：矢板幼稚園）

③スタディーツアー支援

君嶋が主担当となり、スタディーツアーの広報、参加者への連絡、ビザ手配、航空券の手配など、国内の調整業務を行った。

3. 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

事業内容	具体的な事業内容	実施日時	実施場所	従事者人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
農村指導者研修所の運営を支援する事業	持続可能な農業研修コース(SCSA)運営支援・施設修繕	随時	インド・アラハバード地区	3名	研修所の研修生約10名	339
未就学若年労働者教育施設設立運営支援事業		実施なし				
未就学児のための初等教育施設設立運営支援事業	①北インドにおける貧困児童のための僻地教育支援	随時	インド・アラハバード地区	5名	児童550名 教員25名	1,054
	②僻地農村の子供のための健康教育支援	実施なし				
農村女性のための成人学校設立支援事業	裁縫学校の新規開設・運営支援、裁縫教師の雇用	随時	インド・アラハバード地区	3名	農村女性100名	354
奨学金を支給する事業	①貧困家庭の子供に対する奨学金	随時	インド・アラハバード地区	3名	インド・アラハバード地区550名	158
	②SCSA学生への奨学金	随時	インド・アラハバード地区	3名	SCSA学生2名及びインド・アラハバード地区農村住民	190
	③ミャンマー・カチン州の研修生への奨学金	随時	ミャンマー・カチン州	2名	ミャンマー・カチン州研修生1名及びミャンマーの開発NGO200人	111
井戸、トイレ設置、下水整備、衛生教育等の環境改善支援事業		実施なし				
農村の地域開発と農業の改善及び普及を支援する事業	①北インドの小規模農村生活改善のための実用的農民教育支援	随時	インド・アラハバード地区	5名	インド・アラハバード地区3万人の農村住民	4,521
	②環境に優しいきのこ栽培普及と基盤整備事業	随時	インド・アラハバード地区	3名	インド・アラハバード地区3万人の農村住民	900
	③政府保健機関スタッフと農村保健ボランティアの協働による統合的母子保健事業	随時	インド・アラハバード地区	4名	インド・アラハバード地区3万人の農村住民	6,542

事業を推進するための調査研究及び、啓発広報活動	①日本国内における学生及び市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、及び参加	随時	日本各地、インド	5名	500名	488
	②会報の発行(年4回)	年4回	日本、インド、米国	4名	日本国内、インド、米国 述べ1000人	282
	③ホームページ等での広報	随時	随所	2名	日本語・英語が読める不特定多数	205
	④ワークキャンプの開催・研修ツアー・訪問者受入	随時	日本、インド、アラバード地区	5名	日本国内、インド	1,629
	⑤次期事業形成調査	随時	随所	2名	日本国内、インド、ミャンマー	198
緊急支援活動事業		実施なし				
合計						16,971

(2) その他の事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	支出額(千円)
実施無し					